

Title	キリアム・ゴドキン著 政治的正義 新刻版
Sub Title	
Author	伊藤, 秀一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1926
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.20, No.11 (1926. 11) ,p.1503(137)- 1506(140)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19261101-0137">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19261101-0137</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「労働法研究」の第三の論文は、「労働組合法案」を評す」と題し、政府の最後の労働組合法案即ち所謂政府確定案に對する批評である。之に於ては先づ著者は法案が行政調査會の「審議にかけられたこと夫自身の妥當さについて甚しき疑問を有する」ことを明かにし、大體前論の要旨を踏襲して第一に「同一又ハ類似ノ職業又ハ産業ノ労働者」にあらざれば組合を組織し得ざること、第二に組合の目的に關する規定、届出義務、組合の總てを法人とする規定が著しく原案と異なること、次に法案第十四條が原案第二十一條及び第十二條を骨抜き規定たらしめたること、最後に取締規定の嚴重なること、殊に解散規定(第十九條)に對しては「絶對的に解散命令を排斥せねばならない」(二六六頁)と極論し、最後に資本家に向ひ「彼等若し労働問題を論せんと欲するならば先づその資本家本位なる産業觀を棄つべきことを要求せざるを得ない」(二六八頁)又「警察當局が専ら社會治安の見地にのみ捉はれて労働組合を觀察せんとするが如きは偶過渡的現象として生ずる鬭争現象の實相を理解せざるの致す處であり、又軍事當局が専ら國防の見地より労働者の組織化を害せんとするが如きは、彼等の淺薄なる社會觀にとらはれて労働組合運動の眞面目を理解し得ざるものであつて、畢竟自ら偏狹なる愛國心と捉はれて漫りに他人の愛國心を疑はんとする彼等平常の偏見に外ならないのである」(二七一—二七二頁)と論破してゐる。

以上は「労働法研究」に於ける最初の三篇の要旨である。固より末弘博士の此新著には此三篇以外に向數篇を収録してゐる。然し叙上によりても博士の言はんと欲する一斑を窺ふに足るであらう。從來刊行せられたる労働法に關する邦書が多くは解釋法學的所産に過ぎざる時に於て、偶々時を隔つること少くして「日本労働組合法案研究」と「労働法研究」との二個の勞作を得たるを欣快として卒爾茲に紹介の筆を執りたる次第である。(大正十五年十月十八日)

園 乾 治

## 井リアム・ゴドキン「政治的正義」新刻版

William Godwin の一七九三年の著作 “An Enquiry Concerning Political Justice, and its Influence on General Virtue and Happiness.” (初版) が此度 Raymond A. Preston により翻刻せられ四六判二卷通計五百六十二頁のものとなつて出版せられた。但し兩卷に亘つて計十一節が省略せられて居る併し出版者の記す如く、主として省略せられたる箇所は政治的考察といふよりは寧ろ形而上學的考察の部分であり、就中 Hartley, Hume, Helvetius 等の學說の摘記に過ぎぬ部分である。而して此等の節はゴドキン自身も亦讀過して差支へなき部分である事を認めて居たのであるから、彼の主論を進る上に毫も不都合を感じしめないであらう。兎に角、後人に多大の影響を與へ、種々の意味に於て甚だ重要な意義を有する「政治的正義」の如き著作が、今日迄重版せらるゝ事がなかつたといふことは後學に多大の不便を感じしめて居たのであるから、本書の出版は洵に欣快の事と云はなくてはならない。

ゴドキンの著作程當時の英國思想界に深甚なる影響を及ぼせるものはなかつた。William Hazlitt は次の如く記して居る。

“He blazed up as a sun in the firmament of reputation; no one was more talked of, more looked up to, more sought after, and wherever liberty, truth, justice was the theme, his name was not far off.” The Spirit of Age.

時恰も佛蘭西革命によつて揚げられたる抑壓的特權階級に對する挑戰の烽火が、自熱的火焔の勢ひを以て全歐羅巴を席卷しつゝあるの時代であつた。自由、平等、博愛の思想に結合せる時代の革命的精神は澎湃として對岸大英帝國に襲來し、英國に於ける自由思想家等も亦舉つて政治的改革の間

題を論じた。而して主として王制と共和制とが對比せられ、その孰れに據る可きか々喧しく論議せられた。然るにゴドキンはこの諸論を超絶し、雄渾なる筆致を以て一切の政治的形態に對して峻酷にして假借なき否定的論斷を加へ、混沌たる思想界に一大センセーションを與へたのである。

ゴドキンの「政治的正義」も亦明に佛蘭西大革命の一産物であつた。而もそれは同時に無政府主義學說を最初に系統立てたる劃時代的著作である。政府は不必要なる害悪であるとの觀念は夙に希臘及び中世の學者並に偶々 French Encyclopaedist の思想の中に其の創意を發するものであり、且つ無政府主義なる名辭は五十年の後 "Ortest-ce que la propriété?" の著者 Proudhon によつて初めて用ひられたるものであるが、而も這箇の思想を總括して初めて理論的無政府主義を樹立したるは實にゴドキンが此の「政治的正義」に於て々あつた。

ゴドキンは社會に現存する最も顯著なる害悪を指摘し、政治上の諸制規と既成の財産制度とが、如何に一切の罪惡を生む源泉であり、人類を墮落せしむる總ゆる犯罪の温床であるかを闡明せんとして居る。彼によれば人間は生れ乍らにして性善でも性惡でもない。人間の徳性は専ら外部の環境によつて左右される。然るに外部の環境は今日人爲的制度によつて腐敗墮落を極めて居る。到る處に不正と不平等とが存在し、貧者の困窮と不満足は富者の倨傲と篡奪とに對立し、壓制と隷屬とが並び存する。而して政治的制度と法律は如何に這般の害悪を助長しつゝある乎。

ゴドキンの理想とする社會は法律なく、政府なく、一切の強制的權力なく、各人は理性の導く所に従つて其の判斷と行動とを誤ることなき社會である。富を平等に享有すると共に各人が其の勞働を均分する所の共產社會にありては、各人一日半時間の勞働によつて優に生活必需品の全部を生産し得て萬人共に物質的豊富の裡に生活し得可く、物質的焦慮より解放されたる精神は窮極の理想に向つて自由の廣野を飛翔し、人類は其の完成に向つて不斷の進歩を遂げるであらうと云ふのであ

る。理性に信頼する事斯の如く篤く、一切の社會的害惡の根源を専ら人爲的制度に歸せしめ、従つて理想社會の實現に關して甚だ樂觀的見解を抱持せるゴドキンの思想は、かの一切の諸惡を個人の本能性に出づると思念せる Malthus の所説と正に相對峙するものであつた。ゴドキンに對する Malthus の批評が有名なる「人口論」の誕生となつた事情は、今更言ふ迄もなく周知の事に屬する。而も Malthus は、ゴドキンが理性の力を過信したるを見て、之を矯めんがために反つて自ら情慾の力を強調するに失したるに氣付き、「人口論」第二版以後に於て道徳的抑制 "moral restraint" の一項目を掲げ、畢竟人間の理性に訴ふることによつて社會の禍害を除去せんとしたのであるが、之に反し、ゴドキンが「政治的正義」以後の著作に於て人間の感情を次第に重視するに至れるとは、彼此對照して興味深きものあるを覺えしめる。

遮莫、一切の國家的權力を否定して無政府主義的理論を説くゴドキンの「政治的正義」が、當時急進的思想を畏怖すること甚だしかつた英國當路者の忌諱に觸れなかつたのは一奇である。而して其の最も大なる理由の一つは、本書が餘りに高價であつたが爲めであると云ふに至つては更に奇である。本書の初版は高價なる四折判二冊より成り、その價格は三ギニ(一ギニは二十一志)であつた。Privy Council で此の著作が問題になつた時、Pitt が「三ギニの書籍が三志の餘裕も持たぬ人々の間に決して多大の害惡を與へることは出来ぬ」と云つたといふ事は有名な物語りとして傳へられて居る。それにも拘らず、初版四千部は賣り盡され、Pitt の所謂三志の餘裕も持たぬ勞働者等は互に據金して之を求めたのである。爾後 七九六年に修正第二版(同年、同版に依るアメリカ版が Philadelphia にて出版)、一七九八年更に修正せられて第三版が上梓せられた。(Max Beer に依ればチャーチスト運動の白熱化せる一八四三年の交に第四版が出版せられたといふ。"A History of British Socialism," vol. I. P. 114.) 併し第二版以後の修正版に於ては、彼に加へられたる非難を顧慮して論調が著る

しく緩和せられ、初版に見る論旨の精鋭と淵達とが尠ならず失はれて居る。

初版と修正版並に爾餘の著作とを比較して論評す可き點が少くない。又之に關聯して「政治的正義」公刊前後の事情、ゴドキンの性格と交友、不遇なりし其の晩年、並に時人後人に及ぼせる影響等に關して言ふ可き事は頗る多い。併し此等の事情に就ては、Preston が本書の巻頭に稍々長文の Introduction を書いて居るから、讀者は之に就いて其の概要を知る事が出来よう。更に「政治的正義」に關聯してゴドキンを論じたる主なる著書として、H. S. Salt: Godwin's "Political Justice" (with an introduction), 1890. C. Kegan Paul; William Godwin, His Friends and Contemporaries, 1876. H. N. Brailsford; Shelley, Godwin, and their Circle. (1913). Raymond Gourg; William Godwin, Sa Vie, Ses Oeuvres Principales, 1908. Pierre Ramus; William Godwin, der Theoretiker des Kommunistischen Anarchismus, 1907. Henri Roussin; William Godwin, 1913. William Hazlitt: The Spirit of the Age. (Vol. IV of Works, 1904) 等を擧ぐる事が出来るが、彼の生涯に關する最新の著書としては Ford K. Brown: The Life of William Godwin, London, 1926. がある。

ゴドキンの「政治的正義」は社會主義的文書の中にもありても最も古典的なものとしてはあるが、之が社會的批判に關する思想は今日尙全く無用であるとは思はれぬ。William Godwin is one of the men who most deserve a rereading in our time.—Introduction. P. xi.

伊藤 秀一

### Fisher—Mathematical investigations in the theory of value and prices. の再版

一八九二年 Transactions of the Connecticut Academy, vol. IX. に掲げられた Fisher の如上の學位論文が數學派經濟學に於ける不朽の名著なる事は周く人の知るところであつて、この學派に屬する著書にして之に言及せざるは稀である。然るに爾後絶版となり、徒らに名のみ高くして親しく之を播讀する機會は容易に得られなくなつた。Jacques Moret はその著 L'emploi des mathématiques en économie politique, 1915. に於て「右の書は書肆を涉獵するも得べからず、圖書館と雖も之を具ふるは稀である」と指摘し、斯くて二年後の一九一七年には自らこの佛譯 (Recherches mathématiques sur la théorie de la valeur et des prix.) を世に提供した。併しこの佛譯と雖も餘り廣くは行き亘つて居らぬらしい。かゝる次第であるから原書の再び世に現はれん事は此の方面に興味を抱く者の爾しく希望するところであつた。そしてこの希望は本書が最近 Yale 大學版として再版せらるゝ事に依つて満たされた譯である。氏は新版の序文に再版の次第を述べて次の如く言つてゐる。「數學派經濟學者は本書の再刊を頻りに勸告し、その一人は本書は既に古典書の類に入つてゐるから従来よりも更に利用されねばならぬとも謂つた。三分の一世紀を経て再版を世に問ふ所以は茲に在る」(Pref. iii.)

既に本書が古典的色彩を帯ぶる以上、之に對する批評とか紹介とかは素より枚擧に違なき程であつて、單に再版の事實を語る事に依つて紹介の任務は終ると言つてもよいのである。併し私は久しき以前より前掲佛譯書を増井教授より貸與され、多少の親しみを覺えてゐる關係から、この機を利用してその内容の一端を紹介したいと思ふ。